

●奨励賞【論文概要紹介】

ふるさとを愛し、 ふるさとを守り育てる 子どもを育成する 道徳教育

愛知県岡崎市立城南小学校 おおはし きよみ 大橋喜代美

【実践の概要】

豊かな自然と温かな人々の優しさに恵まれた豊富小学校（前任校）の子どもたちには、このふるさとの「ひと」「もの」「こと」との関わりの中に解決すべき問題も存在することを理解し、ふるさとの一員として自ら行動を起こして解決していこうとする心を育てたい。

本論文で述べた実践は、特に「道徳の時間と総合学習の学びのつながり」を大切にした年間学習過程において、子どもたちに「ふるさとを愛する心（道徳的心情）」と「ふるさとを守り育てようとする力（道徳実践力）」を育もうと試みたものである。

【論文内容の紹介】

1 子どもにとって学ぶ価値のある教材

5年生の総合学習では、子どもたちが代々、学区で専業農家を営むMさんの田んぼで、当地区特産の米を手作業で共に作り続けている。Mさんは、子どもたちに地元の米の価値を実感させ、未来まで受け継いでほしいという願いを強く抱いている。また、地域の森林を生かす炭焼き活動でも「ふるさとの講師さん」の一人として貢献されている。Mさんと関わることは、子どもたちに「ふるさと・とよとみ」が抱える今及び未来の課題を身近で多面的に捉えさせ、ふるさとのために主体的に動き出す力を育てるで

あろうと考えた。

一方、今までMさんをはじめ地域の方々の協力に甘んじて、地域の人に対する感謝の思いを明確に意識できずにいる子どもたちの姿があった。そこで、総合学習の米作りでは学区の福祉委員や保護者の方々も加えて新たな関わりをもち、地域の方々との助け合いや支え合いの中での感謝の思いを実感させたい。道徳の時間では、自分たちの体験活動に似た多様な読み物資料による話し合いを重ね、地域の一員として実践で応えようとする「感謝」の価値を深く感じ取らせたいと考えた。

2 学びの実際

自作資料『わたしたちの田んぼ』による道徳の時間では、地域の人々が田んぼに集まる最後の場面に焦点化した中心発問で話し合いを進めた。途中、児童Sからの総合学習とつなげようとするつぶやきを学級全体へ紹介すると、Mさんや福祉委員の方々に対する感謝の言葉や今後の活動を地域の方々と共に取り組み続けようとする意見が出た。そして、後の総合学習の発信活動では、「全校ももちつき&感謝会」と「テーマ別チームワークショップ活動」を行い、Mさんや福祉委員、保護者の方々との交流の場をもった。ワークショップでは、模造紙にまとめた内容を発表するだけでなく、鳥獣除けペットボトル風車製作や五平餅試食などの体験的コーナーを設け、1年間の学びの成果を発信した。参加された方々からの感想には、農家の後継ぎ問題や生態系の変化に対する驚き、今まで活動を共にしてきたことへの感謝の思いなどが表され、子どもたちは、地域や保護者の方々からの温かな思いが返ってきたことを大変喜んでいた。

3 研究の成果

地域の人々の支え合いや助け合いに感謝する心を育むことに重点を置いた道徳教育は、子どもたちに「ふるさとの一員として、ふるさとの人や自然のために応えようとする感謝」にまで

道徳的心情を高めた。また、地域の様々な人との交流を重ねたことは、子どもたちに、ふるさととの今や未来が抱える多様な問題を自分事として考えさせ、問題解決に向けて主体的に自分にできることを見つけ、行動する道徳的実践力を育てることができた。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

生命を見つめる

「見える通りに描く絵」実践

東京都国立市立国立第二
小学校

くぼあきお
久保昭夫

【主題設定の理由】

スマートフォンやパソコンなど児童の周りには無限ともいえる情報量が存在する中で、今求められる感性は「感じることの質を高めること」、仮想現実とつながるのではなく、リアルな「自然の営みとつながること」、そして、それに純粹に「心動かされる感動の体験になること」であると考えている。そこで本研究は、この問題意識にたって、一つ目に、自分の眼で見える通りに描く絵画を通して、人と人、人と自然のつながりを通して実感させる実践。二つ目に貼り絵を通して団結と感動の体験をさせる古典を題材にした共同で作り出す活動の研究実践を行った。

【議論内容の紹介】

1 研究実践① 図画工作科

6年 題材名「油彩で描く〈大切なもの〉」

本実践は6年生の図画工作科において「大切

なもの」と題し、これまでの人生の中で最も思い入れのある「大切なもの」を持ち寄り、じっくり向き合い、見つめて、見える通りに油彩で描くというシンプルな題材である。イメージや空想ではなく、思い入れのある実物をモチーフとして描く活動であることから、児童は練習でボロボロになったサッカースパイクや、お母さんにつくってもらった洋服、幼稚園のころの帽子など、それぞれが自分にとっての宝物を持ち寄り、じっくりと見つめて一心にキャンパスに向き合う姿があった。

大切なものを介した対話を通して、それを価値づけることで自己肯定感を高めていけばと考えている。

2 研究実践② 図画工作科 題材名「共同で作り出す活動「貼り絵」実践」

貼り絵とはベニヤ板に教師と児童有志で下絵を描き、クラス、班に割り振られた各ベニヤ板に小さくちぎった色の紙を糊で貼っていくというものである。各班の板をつなぎ合わせると、時に高さ3メートル以上、幅7メートル以上もの巨大画面に生まれ変わる。児童はここで毎年、「団結の力」と「日本の名画の素晴らしさ」を体感している。これまで葛飾北斎、俵屋宗達、狩野永徳など古典の作品を題材に扱った。

貼り絵は、バラバラの気持ちで紙を貼っていくだけでは作品にはならず、ただの紙くずの集まりになってしまう。児童たちが異体同心で団結する中で調和が生まれ、色の関係性から金色の紙を使わないで金色に見えたり、紙なのに波しぶきに見えたりする不思議な体験をする。床に落ちればただの紙ごみが、「真心」が入れば紙ではなく金色になる。それはただの金色や波しぶきではなく、児童の「心」、さらには「今、この瞬間を生きているという『生命』」そのものとも言えまいか。「一片の色紙の中に『生命』を見出す」—ここに「生の実感」を忘れかけた現代社会の「仮想現実（バーチャルリアリティー）」の弊害を打ち破る方途の一端があると私は確信

する。

見える通りに描き「生命」を見つめる実践は、バーチャルリアリティーのように一方的に受動的、間接的に受け取る営みではなく、「生命の美しさ」を見出す能動的、直接的な営みであり、人と人、人と自然のつながりを通して「生命」に眼を向けさせる。また、「大切なもの」を描くことは、児童がこれまでの自分の歩みを肯定的に受け入れ、振り返り、新たな夢へと進むという自己有用感、自己肯定感を育む過程となると確信する。この実践を通して、今後も図工美術教育の中で児童に、「生命は美しくかけがえない存在であること」を伝えていきたい。

●奨励賞【論文概要】

子どもの心と実践力を 高める防災教育7年間の 軌跡

香川県三豊市立山本小学校

やましたまさしげ
山下昌茂

【実践の概要】

本論文は、経営者（校長）になってからの7年間（四つの勤務校）の防災教育の実践をまとめたものである。テレビ番組でも取り上げられたが、子どもの力でどれほど地域の防災意識を変えることができるのか、子どもたちが大人になって災害に遭遇した際、どれだけチームとして実践しようとする能力・態度を養うことができるのか等、地域防災訓練の実施を中心にチャレンジした実践である。

【論文内容の紹介】

小学校の防災教育に関しては、①地震による被害を最小限に減らしていく減災の知識と技能②被害にあった他者までも救おうとする心の高まり（ボランティア精神の向上）と実践力が大切である。特に②の心・実践力については、大人になってから育てることは難しく、感覚豊かな小学校時代に培うべき大切な感覚（資質・能力）と考える。

1 防災訓練のポイントを明確にもつ

大人主体の活動に子どもが参加する形をとると、肝心の子どもが客体となり、感覚を育てるというねらいが達成しにくい。そのため、子どもが主体となる以下の三つのポイントを意識して、地域防災訓練を計画した。

○ 学校行事として位置付ける

まず、地域と連携という意識を捨てる。主体を学校とし、教育活動の明確なねらいのもとで、子どもが主役の活動を計画する。

○ 子どもを先頭に活動させる

保護者・地域を巻き込んだ訓練の場では、集合・移動・体験活動等の全て、子どもを先頭にする。低学年であろうと、教育されている子どもたちが、素早く無言で整列する・整然と列を組んで移動する・真剣に活動する姿等を見ると、大人も真似るのである。

○ 子どもが発信・提案する場を位置付ける

学校側（教師）が、直接家庭に防災対策を呼びかけたり避難場所変更を働きかけたりしても効果は少なく、また、責任もとれない。しかし、学校で教育を受けた子どもが、家族に訴えると効果がある。子どもの口（言動）を通して、家庭・地域に発信させ、地域全体を変える構造である。このことは同時に、学校での教育実践のアピール・発信にもなる。

2 取組の主なテーマ

（1）第一段階：「訓練への直接参加」

AED・担架運搬・救護・消火等、とにかく、

チームで体験することで意識を高める。

(2) 第二段階：「家具転倒防止対策の実践」

災害による死者は、家具等の転倒による圧死の割合が高い。大掃除のある冬季休業中の校長宿題として、これを全校生に呼びかけた。子どもを動かせ、家族も動かせるのである。

(3) 第三段階：「避難経路の確認・選定」

家が住めない状態になっても、命があれば安全な場所に避難できる。地図を広げ、現場を歩き、様々な状況に応じた判断力を鍛える。

(4) 第四段階：「避難場所の運営」

受付・救護室・部屋割り・ペット管理・日課づくり等、実際の運営をシミュレーションさせる。実体験することによる、多様で多面的な気付き・課題等を引き出すのである。

(5) 第五段階：「被災地区への関わり」

被災体験者ほど恐怖や課題・感覚をもっている人はいない。実際に交流することで、自分たちの学びを評価してもらえることになる。

3 成果

家具転倒防止対策の実践率が、14%から84%に上昇した。地域の自主防災組織が構成・スタートするとともに、小学6年生による「子ども防災リーダー」が誕生した。